

昭和二十四年八月二十五日發行
（種郵便物認可）
（每月一回・十五日發行）

（通第二六七号）

慈光

第二十三卷

第八号

次

近角常音先生御講話……………大字三右エ門記……………(1)
人 生 随 想……………柳瀬留治……………(9)

目

よき人の仰せ……………中島彰悟……………(13)
念仏詩抄(三)……………木村無相……………(17)
歎異抄ところく……………花田正夫……………(20)

近角常音先生講話

大字 三右エ門 記

午前中に申上げたことをもう一度繰返してお話し申そう
と思うのであります。その話はすでにお聞き頂きました通
り私の部屋で三四名の人達が色々とお話をして居らるる。
私も同座していたのでありますが、連日の疲れて居眠りを
しておりました。その寝ぼけのなかに、聞くともしなしにそ
の話を小耳にさしはさんだのであります。

これは皆さんでえらいことを話しているものだ、大変な
ことを話している、と思いましたが、その寝ぼけの私が
その人達にお話をし、その話をかえってこの私が自分でび
っくり致したようなことでありました。まことに仏のお慈
悲と申すことは、こういうことであつたかと思ひ、喜ばせ
ていただいたことなのであります。それから東京におきま
しても専らこのお話ばかりして皆様に聞いて頂いているの
であります。

そのお話はどういうことかと申しますと、其夜おいで下
さつた三四名の人達は、平素から私の話を熱心に聞いて下
さる方々でありまして、一応仏さまのお慈悲の有難いこと
はなかるうかと気持がとがめる。それゆえ今度は出来たこ
とで取り返しがつかぬが、今後はこういう無茶な儲けはせ
ぬようにつしまねばならぬ。自分はこんなに考えている
が君達はどう思うか、と話している。

同座の諸君も、それぞれ自分等もそう思う、無茶はよろ
しくないから出来るだけ差し控えて心得るがよいと思うと
皆至極真面目に話合っているのであります。

私は居眠りしながら、うつつにこの話をきくともなしに
きてびっくりしたのである。これは皆、とんでもないこ
とを話し合っている。われわれの心得ようで何とかなると
の話である。これは聞き捨てに出来ぬ、それ故私は急に
「君等は一体何を言うているのか、止めなさい！」
と申したのであります。

私がえらい勢で言い出したものだから、皆の諸君が驚い
てボカンとしてしまったのであります。実は是等の諸君は
平素から仏法の話聞き、私のところへも来て熱心に仏さ
まの話を聞いている人々である。十分とは申せなくとも一
応は仏様はありがたいと喜んで居るのである。善くせねば
ならぬ、慎しまねばならぬ、控えねばならぬの考えは、こ
の人達だけではない。他力の話を聞いている人はほとんど
と云つてよい程にこうした考えをもって日常に暮している
のである。

を思わせて頂いて居らるる方々であります。

私は居眠りながらも、それらの人々の話していることを
小耳にはさんだのであります。それは金儲けの話なのであ
ります。その内の一人の方が現に、どか儲けをして居られ
る。普通で考えられぬ程の莫大な利益を得られているので
ある。本来その方にしてみれば、その仕事を引受けたくな
かった。入札を辞退したかったのにどうしても辞退しきれ
ぬ。そこで高額の入札をしてその仕事をまぬがれたいと
考えて、其方にしてみれば相当思い切つた高い入札書を差
出したところ、開票の結果はその方の入札額が一番低くて
どうしても引受けねばならぬ破目となつた。

さていよいよ引受けるとなると其方はいろいろと思う。
ああして儲けて、こうして儲けてと、その仕事を引受けた
ことが悪くは思わない。かくて其方は莫大な利益を収めた
のである。けれども、どうも気持がよくない。其方は心
の中思うに、仏様の話を聞かせて貰っている程の者が、こ
うしたどが儲けをするのはどういうものか、よくないので

ちつとは善くせねばならぬ、の考えは、他力の話をきき
ながら、かく悪しきまは相済まぬと思うは、実は他力の話
を聞いていると段々人間が善くなつて行くもののように考
えている人が多いのでなかるうかと思うのであります。

で、私はそうでないことをハッキリして見たくなつて繰
り返して申したのである。

「こんなこととしては済まぬ、心得ねばならぬと思ひなが
ら、そう思ひながら、実は君達は下力儲けをしたいのだ
らう、そうだろう。これからはそんなこと思うのは止め
なさい」

と強く申したのであります。

出来るだけつつしむ、心得ればつつしめる如く思うので
ある。これは真面目に考えてそのように言うているのである
が、寝ぼけの私は、そのようなこと思うのは止めよ。そん
なこと言える分際か、と言いたくなると申したのでありま
す。それで歎異抄十三条を申したのであります。

弥陀の本願不思議におわしませばとて悪をおそれざる
は、本願ほこりとして往生かなうべからずということ、こ
の条、本願を疑う善悪の宿業を心得ざるなり云々。

と仰せられてあるではないかと申したのであります。

この歎異抄は、親鸞聖人の御滅後において、信仰上のことが種々に乱れていって、聖人の仰せられた仏さまのお救いの御意趣が、あまた、こうだということになって誤り伝えられていく傾向が生じた。そのことを心配して歎いた唯円坊が血涙をしばってその誤りをただすために書かれたものであります。

いらぬことなれど、私の兄貴（常観師）の「存命中にこう言われた、ああ仰言った」と色々に云われて、今日兄貴の真意が誤り伝えられております。先般も九州のさる人が申されるのに、「常観先生のお父様は歎異抄を喜んでおいでになったそうであるが、常観先生は、蓮如上人を喜んでおいでの風である」などと申されて、まことしやかに云いふらされているのであります。

私の父親は、私の子供の頃お隣りの寺の住職と二人で、特に御門徒の二三名と同座して御示談をしておりました。

父親は歎異抄をよろこんでおりましたが、このことは當時としては珍しいことであって、清沢満之先生もお読みになつて居られたけれども、私の兄貴がこの歎異抄のことを申しだしたのが始めぐらいで、一代兄貴が云い立てたことが世間にひろめられたはじまりでないかと思われるのであります。後年になってから兄貴は、「歎異抄はまことに有難い御聖教である、自分はこれを父親から聞かせて貰っ

た」と申して居りました。

歎異抄と蓮如上人の御文章の文のあらわし方、言いまわし方は違うのでありますが、蓮如上人ほど、親鸞聖人の書をよく読まれ、御化導をよく頂かれた方は他にないと思われるのであります。さき程の勤行で御文章を頂きましたが五帖全体を通じて、その中に聖人の御化導の趣きがありありと現れているのであります。

「弥陀の本願不思議におわしませばとて悪をおそれざるは」ということを世間の人が誤り易いのであります。

われわれというのは、日常悪いことを思うたり行うたりしながら、片方では、しないでおこう、しないようにしようと思つても、業報なれば何となるやら分らぬのであります。念仏を称えながら悪がやまぬのであります。近い例がかの耳四郎みたいなものであります。受けた業なれば色々のことをやるのであります。

兄貴は常に申しておりました。「悪を恐れざるということとは、悪を気にせないとということだ」と。このような悪いことがあつてはとでもたすかるまいと、悪を気にしていた人が、その悪のやまぬことを、その業をあわれむとの広大なお慈悲を聞かされると、はじめて有難うございませうとなつて、おのれの悪しさを気にせないのである。かかる

あしさまの者をお見捨てないお慈悲でましますかと、これをいただいて安心させられるのであります。

罪業のわれは、我々のその罪業を捨てぬとある仏のまこととを頂いて自分の悪しきを気にせないのである。誰でもみな業の深い人間であるから、御信心いただきたいという人間も業縁にもよおされては、いつ何時ひどいこともやるのである。それであるから、この罪業の人間を捨てぬとあるお慈悲をおもうて、おのれの悪しさを気にせず、ひたすら仏の大慈大悲をいただくばかりであります。

この私も、自分ほど悪しさまの者はないと、口先ばかりそう申しているが、そのくせ内心では、何とか善くなるのではないかと思つていたのであります。これこそ本来罪業深重の身なることを知らざる者といふべきであつて、しばしばお聞きいただきます通り、兄貴がこの私のことを気にかけてくれて、

「弟を子供のようにつけて世話をしてきたが、そのことをどういふのではないが、あれが我慢のやまぬのはこまかつたものだ、可哀想なものだ」

と愚痴のように云っていると、人より知らされて見るとこの私は、兄貴に対して何等よくせないのに、頼みもせずむしろ突張るのに、兄貴の方は、あの性が可哀想におもうと、内心に思うだけでなく、口に出して人に話している。

それほどまでに気にしてくれている。

私は自分の罪の浅深はわからぬが、向うは私を罪深いと見てとつて、それを捨てるでなく、気にかけて、可哀想に思つてくれていふことである。それで私は、遂には、かくなる上は、この私は我慢強情なれど、それが出るなら出よ、どれだけ出ても本願をさまたぐる程の悪なきがゆえに、兄貴がそう云うてくれるのは、私には仏ごころと受けられたのであります。

で、よくよく聞かせてもらつてみますと、遂に思い当たつたことは、それまでは、兄貴を立派だと見ていたのであつたが、そうでなく、反対であつた。兄貴は「罪業の身である、こういう罪業の者をたすけたもう仏様だけは何としても有難い方である」として、兄貴は自分の罪深い故に、仏を一心によろこんでいたのであつたのかと知らされたのであります。

皆さん、信心者は善くなるものと思ひなされるな、かかる罪業の深い者を仏さまが可哀想で捨てぬとの仰せである、そのことを思うて下さいよ！

前の話にもどつて、私は寝ぼけ眼で「君等、止めなき」と申したのである。弥陀の本願の不思議でましますことをいただいて悪を心配せないと云うことである。ここの

ところは細心にいただいて下さいよ。

すなわち、仏のお慈悲を蒙る故に、吾々の善惡ともに仏がよく知ろしめしてお見捨てない。このこと一つを深く思わせて頂いて、自分のとやかく惡を恐れざるが正しい信心の姿であるのに、今の話している人達は、お慈悲に甘えてはいかぬ、心得ねばならぬの考えで、これでは何のために仏様を聞いているのやら意味をなさぬではないか。

われわれというものは、よくしてくれたりよくしてくるでつけあがって嫌われ者でしかないのである。こういう横着物は世間には嫌われるので、それが人間のおちであるいよいよ中味はこれくらいのものである。

皆様ご存じのY君、零落をした。継母に仕え苦勞をして遂に長男でありながら家を出て分家したが、戦後、農地法で実際に田畑を耕作しておらぬので田地を取りあげられたのである。Y君もその一人であった。金銭のことで大変難儀をして、何ともしてみようのない生活状態である。ここに別の方があって、そのY君を有難い信者と思うている故に金銭を贈り、子供の世話などをする。Y君はその方に対し深い感謝をもち、また申訳け無う思うているのであるが、實際生活上こまる故、何かにつけてその方を頼りにし、無心を云う結果となる。そうなる親切なその方も、かく度重なって無心を云われると困ってしまう。

と仰せられてあります。本願に甘えてならぬと考えているのは、本願の真意をただかざるものであって、本願他力のご意趣は、憐れみたまう御本意は何であるかと申せば、歎異抄、第三条の次の文にあるように

「いずれの行にても生死をはなるべからざるをあわれみ
たまいて願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば
二云々」

で、ちっとでもよくすると思うのは、本願他力のご意趣にそむくと仰せられてあります。

どうか皆さん、聴聞するにあたって、われわれ立派で仏さまを聞くのではないのであります。業人を可哀想と仰せある。そのところをよく気をつけなければいかぬのでないかと、それらの人々にお話しをいたしましたのであります。

そのように云われたとて、そう思う様に出来るものかとなるも、その如く出来ないことを私は憐れんで下さるのでないか。ここをよく気をつけねばならぬのであります。

なおつけ加えて、撰取不捨のことを申しました。

弥陀の本願信すべし

或時、その人の前でY君がうとうと居眠りをしていたが、その人が他の人に、Y君に平素かくかく心配してあげているが、次々と要求されるので、遂には嫌になつてしまふとしきりに愚痴をこぼしていたのである。居眠っているはずのY君がこの話を聞いていたのであった。Y君が家に帰ってから私へ手紙を書いてよこしたのであるが、始めはあれはあだ、これはこうであったと弁解しているが、終りには、あれも申訳けなかった、これも相済まぬことであつたと、何度も〴〵書いてある。

このように人間は信心者同志の間柄でも最後には愛想をつかしてしまうのである、これは人間の常識というものであります。

またもとの話にもどって、それらの人々がちっとは心得ねばならぬ、本願ほこりしては助からぬのではないかと思ひこんでいるのである。

この思ひは誠に無理ない考えであつて、かく申している私も、長らくの間、聖教を読み損こないをしておりますこのことは実にあやまり易いのであります。そう取りやすいのであります、次の文に

「この条、本願を疑う善惡の宿業を心得ざるなり」

本願信ずる人はみな

撰取不捨の利益ゆえ

等正覚（とうしようがく）にいたるなり

信心の上には、これがないといかぬのであります。歎異抄の第一条にある如く、自分の性質（でき）のよしあしの如何でなくして、仏のおあきれない不思議の誓願にすくわれて、ああありがたいとおもう時、すでに撰取不捨のおめぐみにあずかっているであります。

こう申しましたら、その内の一人の方より「ああそうか」との声があつたのであります。皆の人間を真赤にして一生懸命に聞きいつている。私も一生懸命におはなし申しました。

撰取不捨とは、念仏をよるこんでいる人間が「罪惡を犯し念仏を申さずして命経らんとも」往生するは間違いないのである。兄貴の子供は戦場に行き、いよいよの時になつて、天皇陛下万歳と申さなかつた。部下の者達に「お前達よくやってくれた」と礼を云って命が終つた。これを兄貴が聞いて、申訳けないうちに思つていたので、それでよくよき気にする。私はそのことはもうよい加減にしておけばよいでないか、と申したぐらいであるが、人間というものは、その場合にいたつて、いよいよとなれば変になるのであります。

それでありますから撰取不捨の願をたのみたてまつつてみれば、如何なる不思議あつて、変になるともお見捨てないのである。歎異抄の中に、処々申されてある撰取不捨ということは、みなこれなのであります。御和讃に

十方微塵世界の

念仏の衆生をみそなわし

撰取してすてざれば

阿弥陀なづけしたてまつる

とありますように、十方微塵世界の誰でもでないの念仏の衆生を撰取不捨という広大の不思議の願力でたすけ切つて下さるのであります。

念仏を御成就なされたは、それ程までにしてたすけとげずばやまぬお念力をもってなされたものゆえ、このお心持がありがたいわけなのであります。

一度ご信心をただけ、二度と動揺せぬというはあやまりであります、そのように考えていると間違ふのであります。どれだけ聞いても、どれだけよるこんでいたといよいよよとなるとぐらつく奴なるゆえに、仏様の方でぐらつかぬよう撰取不捨の大願業力でたすけて下さるのであります。「撰取してすてざれば、阿弥陀と名づけたてまつる」とは不思議なありがたい御方なるが故であります。今の話を諸君にしながら、本人の私がビックリ致したの

をいただくことだけでしのがせて貰うわけなのであります。これで終わりますが、私の滞在中ご不審の方はよく聞いていただきたいのであります。何時でもお話を申します。このことをおたのみ申します。

△附記▽

常観先生講述雑誌「求道」中の、教行信証、信巻に、

「真心を開闡（かいせん）することは、大聖矜哀（こうあい）の善巧より顕彰せり」

大聖とは釈尊、釈尊の仰せ。その仰せが阿弥陀仏と一致して、私共を救わんとの遣る瀬なきお慈悲である。この事は信巻の終りの方に説かれた阿闍世王入信のところに、

「ここをもつて今、大聖の真説によるに、難化の三機、難治の三病（五逆、謗法、闍提）は、大聖の矜哀をたのみ、利他の信海に帰すれば、これを矜哀して治し、これを憐憫（れんみん）して療したもう。たとえば醍醐（だご）の妙薬は一切の病を療するが如し」

との文があります。これが大聖の矜哀であります。善巧とは阿闍世の入信にいたる経路であります。このことは懺悔録にくわしく述べました。云々。

であります。それだから撰取不捨でたすけとげて下さるのであると、始めて思いましたには、何としてみてもたすからぬ極悪深重のもの、箸にも棒にもかからぬもの、難治の三病難化の三機と申しますが、かかるひどい者を、耳四郎を極悪人と思うて居りますけれども、かく云うわれわれが、その耳四郎であります。五逆十惡のわれわれを捨てたまわぬとある広大のお慈悲なることをよくよく思わせていただくねばならぬのであります。

かくお話し申しているうちに、今の如く諸君も大変よろこんで下されたのであります、諸君を門前まで送り出した後も、実はこのことを思うて茫然としていたのであります。今までもこのことを思うて茫然としていたのであります。かくも話せなかつたのであろうか、実に話せそうであるのに話せませんでした。

われわれごとき、特別のやくざ者、罪業深いものを大慈大悲のご真実ばかりで、とうとう仏とさせられてしまつておすくいを蒙るのであります。他力真宗の真意は、何処々々までものお救いということでもあります。兄貴の存命中しばしば申した言葉に「われわれのような貧乏人が少々ばかり都合よくなつて、この通り金持になつた」といふけれども、元来お救い米をいただいてたべて行く身である」とわれわれ罪深いもの、かかる罪深い者を憐み下さるお慈悲

歌集『雲霧』抄

筑紫野 春草

今日は今日の希望に生きてすがすがし豊かに開く朝顔の花

ひとりひとりの内をのぞけばうそぎむき独生独死の黒きかげもつ

たのみ来し知命すぎたれ憂ひなほ雲の如くに湧きてとどまらず

日（ひ）が立てし人生観にとらはれて己れと生きの世をせばめゆく

念仏自然の外なしといふわが意をばやうやく解して莞爾たり友は

我がどちの誰彼をむごく批判すれど己が足もとは言はず互に

人生随想

柳瀬留治

善を餌にして人間を釣り取るもの

人は善人になりたがるものだ、とは前に言った。我々の美をもとめ、真を求め、聖を求めるのも、等しく善人になりたがる一連の心に他ならない。

ところが、我々の内部に、その資格がなく、実質を持たないで、心中は不安定かぎりが無い。そこでどうしても安定を求めずいられない。資格が「無」だと断定され、無から「有」がどう絞っても出来ないといわれても、求めるところは断てないものである。たとえば、水がないとなればいよいよ渴きをはげしく感じ、渴きを癒したい念が切になるのみである。それは我々山の尾根など縦走して水筒が空になり、烈しい渴きを生じたとき、幻覚となって耳に水音が聞えて来たり、又目前に谷川が現れて、すぐに水が渾々と流れるまぼろしが現れる。それで死の絶壁を下ったりなどして遭難することがしばしばあるのである。これは道に迷った時と同じである。

我々内部に求めるような善美のたねを持合せぬと、いよいよ希求する。希求の念が凝って善美の片鱗があるかの如くイメージが生じて来る。それは希求の投影たる幻覚なのだ、たしかに存在するものと思える人々はその幻を追いかけてはてしなく迷うのである。そして人間そのものの真相をつかんだのは、彼の文豪ゲーテであり、それは彼の詩、ファウストによく描き出されてあり、その点は積尊と等しく人間性の底を見極めた人といえるのである。

人は善人になりたがる、それは己に無いものを求めるので全く空であり無であるが、反面、それを手がかりとして真実の道に辿りつけるので、全然無駄だとは申せぬのである。それは、善美を求め、聖を渴仰するその志す通りになり得るのではなく、志す所と全く意想外のコペルニクスの転廻をした世界に立ち、己の実体そのものを初めて知らされ、大安定の境が開けて来るのである。

己の美美を追うことは空しいことであるが、それを方便とし、手段として究極の光に遇え、究極の大道が得られるのだとも言えるのである。

善人になりたがる人間だから、善を餌にして我々を釣りとり得るのだとも言えるようである。

若い頃、世親(せしん)の唯識論(ゆいしきろん)を読んだことがある。識は我々の心が、境、即ち対象を認識する作用であるが、心の迷い、即ち無明から、ありもせぬ間違ったおもいもち、それがたしかに外界に対象として存在するものとして見えてくる。それによって行動するからいよいよ迷い込むのである。驚くことには「識が境をつくってそれを認識し行動する」ことが説かれているのである。我々の想念が、境、即ち心のむかって行く対象世界を作り、それを正しいものと信じて迷い込むのだという意味のことを讀んだのである。

我々の対っている世界が、おのれ自身の作った世界だとは、詭弁論(ぎべんろん)のようだが、迷いの想念により、ありもしない対象を眼前につくることがたしかである。

更に進んだ対象として神を造り、仏をも造るのである。己の希念から神を想像し、仏を想念に浮べ渴仰する。これを観念の念仏といわれ、本物でなく妄念の造った対象によるイメージに過ぎない。

裸になれるか

元々我々は裸で生れて来た。着物は体を保護することにはじまる。原始民族などは、かくすと見たがる性的な発生から衣服が出来たと心理学でいっているが、免も角、文化が進むにつれて、体の保護を越え、裝飾の意が強まり、その人をカバーしてよりよく見せることになりつつある。

衣服によらず、凡そ文化というものは、身をおおいその人をカバーし、力あるらしく価値あるらしくなさしめている。地位、資産、学問、芸術もそうした類のものとも見られる。ことに近代科学力は人間の力で宇宙を征服出来るものとして居る。

一体外から着けたものがどれだけ、その人の人間性になり得るであろうか。どこまでが着物で、どれだけがおのれの物になっているであろうか。地位、資産、学問、智識、技能、等々着けたものを全部脱ぎ捨てて、さて残る己れの心の実質はどれだけのものがあるか、己れの内に省みたい人間生活というものは、心と心が通い合うところがなくては味気ないもので、形の上で親切にされても、心の真実がなければ無味乾燥な事務的に終り、実感が伝わって来ない。そんな空手形で人は動かされおどらされる筈はない。ことに芸術においては、人の心に響く芸とはなり得ない。

社会適応の概念で固めた甲冑を脱ぎ捨てて真裸になり、その真実を現わすのでなければならぬ。ルソーも自然に帰れと云っている。この頃、文化にのぼせ上って自然を忘れて

いる。
我々は体でさえ素裸になりかねる人間である。心の裸というよりはより六ヶ敷い。一人人間は本当に裸になれる人は世に幾人あるか。あれば生きながらの神であり仏である。およその人の裸になれるという人は、本物の裸でなく表面的な裸に過ぎない。各々おのれの内に省みると判るとであろう。

さてどうして人間にこんな鱗がついているのだろうか。人間は社会協同せぬと生きられぬもので、おのれをまげて生きねばならぬ。生きるためには他の利害攻勢から己れを防衛せねば死滅する。それで防衛のこけらが出来たと心理学でいうが、社会に因があるのであるまい。おのれに自我という恐しい奴があつて、人を殺して生きようとする本能それが元だと思ふ。私など大抵のことは口に出来る方で、隠さねばならぬことは人間には殆どなく、皆同じだと思つてゐるが、内心の問題になると、真裸のおのれの正体が何であるか、自身でさえ掴めない。それで永い間宗教的に苦しんだが、結局おのれはラッキョウだ、芯の芯まで皮また皮の重なりで、剥げばまた内から出来、皮は尽きない。この

のわからぬによる。

誰もおのれが真直ぐで正直だとし、おのれの言うことは正しい、見方も正しい、理が通つていと主張する。

動物には、おのれという自我意識はないが、これに代る本能があつておのれの欲望を貫こうとしてゐる。人間も本能的におのれを肯定する。肉体そのものが本能的に出来ており、肉体を容器とする精神も本能的に自我を肯定し主張し、他と闘い、おのれを守ることをする。その点動物とそう変らない。結局、文化をもつという点だけが、それもまた功利を出ないもので、動物より不正直で一層自我的ともいえる。

おのれとはどんな代物か、これは持主の御本人は最もよく分つていそうなものであるが当の本人になると仲々わからぬ。何にあれ、何処までも主張し自分を守つて行くに精一ばいになつてゐる。この自我、我執のみでおのれ自体に對しては盲目的である。孔子のいう「知命」ということ、仏教の悟りということ、このおのれを知ることである。

東洋では道徳に於いても、また芸においても、没我という様に、おのれが無我になつて、天真の真や善や美があらわれるという。それは自我の邪念から解放されることによりはじめて真にふれ得られ美をなすからである。真の美もおのれが素裸になれてはじめてあらわれるものである。

これは自我という奴である。畢竟、皮の塊のラッキョウであるとわかつた。有名な禅の考案に、柳は緑、花は紅で、我々自我個性の緑は緑、紅は紅、寸分変え得られないのが人間、その人間性を見極わめが禅の見性悟道（けんしよう、どう）であるのである。裸は大切であるが、或程度以上は裸になれないのが人間だということに決着する。

世間に、無病長生の秘訣は嘘をつくなにあるという。真実と虚偽の使分けすると心を勞し、重荷になり疲れる。身軽にどう転んでもボロの出ない生活、それで長生きするのだという。しかし心の裸の限度には大体底がある。それは自分の心底を省みると人間の底が判りきつてゐる。本當の裸になったり、なられたりすると、醒いものばかりで目も当てられないであろう。

己れを知るといふこと

己れを知るといふことは、我々一人々々の生涯をかけて根底となるべき大きな仕事である。自覚というもそれである。己れを知ると他人も知られる。よく人に対して不平不満を云う人がある。理想家とも見られるが自らの知られぬためである。又不満を自身に向け、自己批判のみをし、自虐をしている人、これは道義者に見えるが、これまた己れ

おのれが素裸になれるということ、自ら手放しになれることで自我の囿圍（れいご）から解放されること、自我執から離れることである。我執から脱れ得るとおのれの代物（しろもの）の真の値打がわかる。他人に對し、社会に對し不平不満をあまりいわなくなる。おのれがわかるといふことは、人間というものの底がわかることである。

自我の固執より脱してはじめて正体が分かるのであるが、さてそれを捨てよ、離れよといわれれば、より固執し放されぬ。おのれより外に力にするものがない間は、これを命の綱と掴んで離さない。値打のないつまらぬおのれよりもっと遙か偉大なもの、力になるものが与えられ、大きな価値に触れて、はじめて放せるのである。これは結局、偉大なる宗教以外に道のないことである。

おのれ以上の力強い偉大なものに遇うと、おのれの小さい醜いものたるものが底からわかり、我執のつまらなさがわかり、その大きな力の前に頭をさげる。これは私においては念仏なのである。念仏において機の深信といつて、おのれの無価値の分かることで、それは法の深信、即ち大なる力に引揚げられて、はじめて自らを捨てられることで、ありのままな気楽さに生涯を過ごせることになる。

かくおのれの代物がわかり、人間性の根底がわかると、生活上如何なる不便に遭遇し、どう立場が崩れようと驚き悲しむこともなく、外界の如何に動遙せず生きて行ける。

よき人の仰せ

中島彰悟

今の世はいずこをながめても落付のないことである。この中であって日夜労苦を重ね、罪業にのみ朝夕まどって居るわれら、一度、人生の如何なるものなるかを沈思する時「名号のいわれ」を聞くばかりで無上涅槃のさとりを開かせて頂ける御宗門に流れを汲むことが出来たのは、唯事ならぬに氣付くことであらう。

さて、この名号のいわれを如何にして聞信するかという問題には甚深の注意をせねばならぬ。すでに如来は、第十七願に、十方諸仏に、わが名号を讃歎されて、十方衆生に聞かしめんと誓約があつて、われらが聞信するのは、本願の名号であるが、これを教え給う諸仏の証誠（しようじよう）讃歎の必要を忘れてはならぬ。存覚上人は「聞いて信行するのはこの願の力なり」と申していられる。弥陀は衆生救済の本意を遂げんがために、広く現代の濁乱の上にも教法をとおして自らを知らしめ、我等凡愚を極善最上の者に引きあげんとして働き続けて下さるのである。

されば、諸仏菩薩、即ち善知識の讃歎は弥陀の悲願が根法然上人の御開宗は、本願名号を明らかにせられたという他にないから、選択集は名号の威力を示された教法で、そのまま名号のいわれである。親鸞聖人の教行信証は、又一仏名号の開頭にほかならぬから、これまた名号のいわれである。

さて名号のいわれを聞くと、仰せを蒙ること、その仰せは、即ち信仰の告白である。形こそかわれ積尊以下あまたの善知識の仰せは、ことごとく名号のひかりそのもので、歎異抄によれば

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の仔細なきなり」とある。この信仰の告白は、よきひとの仰せが所信となつてゐることに氣付かねばならぬ。

そこで、名号を所信とするのか、仰せが所信となるのかという問題になるが、由来名号のいわれというは、よき人の仰せそのものである。仰せの本質は本願真実の顕現で、如来の教法であるから、名号の力はよき人の言葉をもってのみ云いあらわされ、これを聞くところに信心決定の身になるのである。

されば法然上人の仰せは親鸞聖人の暗を破る光りであつた、「智慧光の力より本師源空あらわれて」の御讃歎は実

底であつて、換言すれば、善知識の仰せは如来から我等への賜りものであつて、その教法は本願名号のいわれであるから、これを聞信するところに、自力を捨てて本願に帰することが出来るのである。親鸞聖人は信巻に「真心を開闡（かいせん）することは大聖矜哀の善巧より顕彰（けんしょう）（けんしん）す」とお述べになつて、世に善知識の哀々たる善巧方便の教がなかつたなら、名号のいわれの聞信出来る筈はないのである。

ところが今日の多くの人は、教ということあまりに輕いことにして、信ぜられぬ／＼と自分ひとりで悩んで居る天上の月は、月の光りで月が見える、月みずからの光りによつて月を見ることが出来る様に、名号の光りが教で、教によつて、名号のそれ自らがあらわされるので、自分と如来と直接ではない。即ち如来の真実は、これを信受したる善知識の言葉となつてあらわれ、その教が人の心を貫く時に信心となるのである。

○ 天地震動のさけびである。このように善知識の仰せに着眼して、仰せを信するのであるから、我等は第一に明師を求めねばならぬ。

執持抄、第二章に、「このたび善知識にあいたてまつらば、われら凡夫、かならず地獄に落つべし……明師にあいたてまつらでやみなましかば、決定悪道へ行くべかりつる身なるが故にとなり」とある。明師とは其の知識のことである。

この明師は人格者でなければならぬ。しかしながら人間である以上、沢山の業を持って居る、醒き陰は人のあとを追つて離れぬものである。そこで、善知識の人格は如何なるものかと申すと、如来廻向の大信によつて、常にそくばくの業のつまづきを引き立てられつつ浄土の旅をしている人、即ち如来によつて新しき歩みをなしつつある人である。しかしながらこの人格は第二のもので、尊いのはその人の仰せである。落つる身の浅間敷きに胸はりさけ、久遠招喚の勅命を体験しつつ有縁の同明の手をにぎらんとしての仰せが第一である。もし誤つて、人格を第一とする時は、知識帰命という異解になる。御伝鈔や歎異抄の、信心證論の段は、上人の門弟の多くが、本願の廻向に氣付かずして法然上人の人格を第一としたからで、師と同じ信心にはなれぬと考えておつたからである。

宗祖は一代仏教の中で、大無量寿経が真実教であるときとめられた。それは、弥陀如来と釈尊が対立しての御教説ではない。如来が釈尊に降って、釈尊はそのまま弥陀であり、如来の本願にうちとけて、念仏三昧の大寂定のお心で説かれたからである。

この大経の教があつて、はじめて名号の光りが地上にたなびいたのである。故に経の終りに「三千大千世界は六種に震動し、大光明はあまねく十方国土を照らす」と説かれてある。

われら、この真実の仰せを聞き、仰せにしたがえば、明信仏智の眼がひらけて、釈尊と同じ念仏三昧に入ることが出来るのである。如来のこの真実は釈尊から次へくと七高祖の心を貫いている。故にすべての御聖教はみな真実のおきかせである本願名号の顕彰である。名号の法は独りで動くものではない、火を出すには薪（たきぎ）がいるように、法の活動には人のことばをとうした教がなければならぬ、ここに気がつかないなら何時までたっても信決定の身になることは出来ぬ。そのみならずよき人にはぐれて居ると無道心のままで悪道におちるより道はないのである。世間には、名号のいわれは知っているが信心が得られぬ

選択の願心に徹底したる真の善知識の仰せによらねばならぬ。強く云えば、よき人の仰せは如来が人を通して如来の真実を語りしめたもうということとなる。

しかしその如来の教法を信じた人に遇い、その教えを聞信することは、難中の難である。大経和讃に、

善知識にあうことも

おしうることもまたかたし

よく聞くこともかたければ

信ずることもなおかたし

とある。これは難信の法たることを明らかにし、一面に知識と教法とは離れぬこと、それと共によき人の仰せが所信たることを示されたものである。

されば聞法に志す人々は、古今の染香人（せんこうにん）が如何に真摯熱烈なりしかを思念して、不惜（ふしやく）身命の心より教えを聞かねば永劫に取りかえしのつかぬ事となる。和讃に

諸仏の護念証誠は

悲願成就のゆえなれば

金剛心をえんひとは

弥陀の感恩報すべし

とあり、御一代聞書一〇〇に、

君を思ふは、われをおもうなり。

と云う人が多い、それは仏徳讃歎の仰せを信ずるといふことを知らぬからである。またお聞かせは皆一つ事である。仰せをひとつかみにして居るものもあるが道心がないからである。あの人でなければならぬと、人格や話しぶりにとまっているのも法の重きを知らぬ誤りからである。

真の仰せは、学問や説教から出るのはない、如来の本願を信じた人、即ち如来の入法を体験しておる信念のほとばしりて、世間の道徳や学問や思想を超越したる如来の教法でなければならぬ。蓮如上人の御文に

「如来の教法を十方衆生に説き聞かしむるときは、唯如来の御代官を申しつるばかりなり、さらに親鸞めずらしき法をもひろめず、如来の教法をわれも信じ人にも教え聞かしむるばかりなり」

とあって、この教法は、善知識の人格を超えたものであるから、妙好人の言葉には、人の腸（はらわた）をえぐる様なひらめきがある。もしこれが学者であつたならばなおさらのことである。余はかかる人にあい、教を聞くたびごとに、それが如何なる人であつても凡夫のまま、そこに如来の化現（げげん）のような感にうたれるのである。

元来名号は如来の願心の表現である。本願の結晶が名号であるから、これを云いあらわすことの出来る者は、如来

善知識の仰せにしたがい、信をとれば、

極楽へまいるなり。

とおしえられるところである。

昭和十二年三月、「如来の教法」より

月と水と信仰

月は降らずして水に浮び、水は上らずして月を宿す。

月はあくまで月であつて水ではない、水はあくまで水であつて決して月ではない。月は月にしてしかも水に宿り、水は水にして而も月をやどす。

凡夫はあくまで凡夫であつて仏ではない。仏はあくまで仏であつて凡夫ではない。しかも仏の慈悲は、私ども凡夫の貪瞋煩惱の中にやどりたまひ、凡夫はあくまで凡夫のままでみ親の慈悲をやどす。ここにおいてこそ、極悪不善の我等ごときものの救済がある。あゝよろこばしい哉。

謹告

「慈光を身に受けて」の拙著を再版いたしました。

定価、三五〇円。発行所、京都市下京区堀川通花屋町百華苑。振替、京都二五七八八番。（花田記）

念 仏 詩 抄 (三)

木 村 無 相

ご恩のみ名

たとい大千世界に
みてらん火をも
すぎゆきて
仏のみ名を聞くひとは
ながく不退にかなうなり

ご恩のみ名よ
ナムアミダ
ご恩のみ名よ
ナムアミダ
お や さ ま

わたしの奥に
炎々と

十方微塵世界の
念仏の衆生を

ほんのうの火
燃えたるを
かきわけまい
今ここに

みそなわし
撰取してすてざれば
阿弥陀となづけ
たてまつる

ナムアミダブツと
聞かして
不退の身とぞ
なしたもう

ナムアミダブツの
おやさまは
ねんぶつしらぬ

わたくしに

はからいつくせる
ものじやない

ナムアミダブツと
あらわれて
たすけてくださる
慈悲のおや

うたがいつくせる
ものじやない

ナムアミダブツの
ほかはなし

ドシと ぶつかれ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツの
ほかはなし

ドンと

われに
尊号—
ド シ と
ハ カ ラ エ
ナ ム ア ミ ダ ブ ツ

ドンと
ドンと
ドンと
ドンと

われに
尊号—
ド シ と
ハ カ ラ エ
ナ ム ア ミ ダ ブ ツ

ひ と た び
ひとたびみ名を
聞きしより
ひとたびみ名に
遇いしより

ドンと うたがえ
ナムアミダブツ

わが行く道は
ひらけたり

わが往く道は

ひらけたり

出 発

ご恩といえは

このまんまが

ご恩

さあ出発だ

このまんま

から

ご恩の中から

さあ

出発だ

雪

雪がふるふる

雪がふる

煩悩無風と

雪がふる

雪がふるふる

雪がふる

大悲無倦と

雪がふる

お大師堂で

だあれもない

お大師堂に

ご開山さまと

わたくしひとり

ご開山さま

ナムアマミダブツ

おろかなわたしも

ナムアマミダブツ

ひらくもの

わがごころ

貝のごとくに

ふと閉じぬ

このかなしみをひらくもの

ただねんぶつの

ほかはなく

ただねんぶつの

ほかはなく

昭・四六・二・一二日

歎異抄ところどころ(二)

花 田 正 夫

三、往 生 と は

世間では、こまりはてるとか難儀するとか、或はくたばった等の時に、往生した、とよく言うが、これは仏教の本来的意味をたがえたもので、他力本願を依頼心の代名詞に使っているのと同じ誤りである。

往生とは往つて生れること、即ち浄土に生れることである。しかしこの言葉が自分に体解出来るには、少くとも私にとっては種々な縁とよき人の導きによらねばならなかった。ことに私は岡山県の田舎の真言宗の家に生れて、文字通り仏とも法とも知らず、また教えて貰う機会もないところに育ったので、私の人生の旅は、仏法はあっても無いと同様のいわば無仏のところから出発している。

この私が死ということをちか感じ始めたのは、幼い日妹が池におちて死んで、その死体にふれて異様な冷たさを覚えた時からであった。次に、旧制中学の三年生の四月、桜の花と共に二十の兄が急死し、その年の秋、紅葉と共に二十八の姉が二人の子を残して散ったことである。私は田

舎中学にいたので高校の入試に懸命に備えねばならないのに今度は自分も死ぬるんだと思うと勉強も身に入らなかつた。中学の親しい先生を訪ねて「死んだらどうなるんですか」としつこく尋ねたけれども空しい答えしか与えられなかつた。

又、その頃第一次欧州戦争後の経済の大変動で、財産を失ってしまった父の苦悶、加えて世間の風の冷たさにさらされて、私の哀心から願ひもとめたものは、不動の生のよるべであり、不滅の死の帰するところであつた。

そうしているうちにやつと六高に入学出来たので、この時にこそかねての願ひを満足しようとして心にきめた。然し狭く小さい自分の考えよりも、まず先覚者の教を聞こうと、宗教の書を求めた。内村鑑三氏の「求道と平安」は、真面目にそうしたことを求めた人もあるんだなあ!と教えられて感銘が深かつた。

四 死 後 の 問 題

まず神道には、高天原と黄泉の国を説き、キリスト教で

は、天国と煉国、仏教には地獄と極楽が説いてある。どれもみな死後の世界を述べてあるが、私自身には死んだらしまいなのか、死後の世界が本当にあるのかサッパリ見当がつかなかった。

肉体は亡んでも靈魂はのこり色々の世界に生れると説く教もあった。しかし肉体は分るが靈魂とは何かとなるとわからぬ。大和魂とかいうのであれば理解出来るが、靈魂となるとさっぱりである。原始時代に水面に映る自分の影に驚いて、自分の身体以外の自分を靈魂と云ったとか、或は身体は眠っているのに色々の夢を見ることから、肉体を離れて魂が外で遊んだと定めたとかいうことも読んだ。

又神靈術というものがあって、色々な不思議と思われる現象をまことしやかに拾いあげて説く書もかじって見た。

結局は何処にも本当に納得のゆくものは得られなかった。

そこで窮しきつた私は、嚴冬の日、人間は腹一杯食べてぬくぬくと布団に寝ているから浮調子になって文句が多いのだ、とにかく山に入って、寒さとひもじさと孤独がせまったら本音を吐くだろうと、今から考えると兎戯に類することだが、聖書一冊を持って山中に籠（こも）りはじめた。しかし三日目には風邪になって高熱を出し、フラフラのまま家に帰った。

そうこうしているうちに、明日の天気もわからず、襖一

中道に立つ真実の仏法には、有の見も、無の見も、邪見であり偏見であると破してある。正信偈にも「竜樹大士が世に出でて有無の見をことごとくくだかれた」と親鸞聖人が特筆されている。

中でも仏教で厳しく誠められるのは無の見である、もしそうした見解におちると、聞法の縁が断たれるからである。有の見の人は、誤っておつても聞法の縁が残るから、何時か正しい教に導き入れられる可能性もあるので割合に寛大にあつかわれている。

今にして思うのに、死後有るの無いのときめることが、独断も甚しいことで、邪見とか偏見と呼ばれるところである。私がこうしたところをさまざまうていた時、この無の見を破ってくれたのは父の死であった。

岡山の医大に入学の通知をうけた四月一日に父は死んだ。二週間ばかり看護もし、野辺の送りもすましたが、父は死んで消えてしまったとはどうしても思えない。理屈だけで考えると無くなってしまうとなるが、情意の上では何処か遠いところへ行ったので、無くなってしまったとは思えなくなった。これは私のように執着心の強い者にはなおさらであった。

奈良の某寺で聞いた話であるが、或無神論者があった。或朝子供が学校におくれかかったのできびしく叱って急が

れ向うが見えぬ身で、死後のことなどわからう筈はないと自分の力の限界が知れはじめた。孔子は「生の従来するところを知らず、いずくんぞ死を知らんや」と云い、トルストイも「死後のことは誰が何と云ってもわからぬ」というのが本当だ」と語っている。すると人間の限られた智慧ではわからぬという域から出られないのかなあ!と思った。

五、有見と無見

死後のことは自分の智力のどこかぬこととなったが、わからぬということ無いということは全然別問題である。けれども、わからぬということは、無いということに落ちこみ易い。ことに当時実験科学を学んでいたので、ロソクの灯が燃えつくして消えるように、人の死後も消えてしまふのだろう、というように無（む）の見（けん）に段々傾いて行った。

そうした立場からは、仏教に死後の地獄とか極楽を説くのは、勧善懲悪（かんぜんちようあく）の方便であろうぐらいに思った。しかし靈媒によって死者の魂と問答出来るとか、お盆には祖先の霊が帰るので魂祭りをせねばならぬとまことしやかに云う人もあったが私には一切信じられないことであった。

あとで分ったのであるが、こうした見解を仏教では有（う）の見（けん）として否定されている。ことに無我と

せた。子供はおくれまいと左右を注意することもなく走り続けて、交通事故で即死した。そのことがあってからは寺の墓地に毎日、無神論者がお詣りして、香華を供え、しばらく墓に話しかけるようになったそうである。

私共は智識にかたよった判断をするが、本当のことは智情意の三つの上で、全人格でうなずけるものでなければならぬ。もとより感情にかたよったものも傾見であり、迷信におち易いし、意志にかたよると偏屈な頑固となる。

六、如來の調伏

このように私が五里霧中の彷徨を続けているうちに、人生問題で壁につきあたって、智情意の三つが何の役にも立たなくなつた時、かねて伯父から歎異抄を勧められ、更に六高のドイツ語教授で私共の担任だった池山先生の導きをうけて親鸞聖人の信徳にふれはじめたので、私の心も段々に調えられていった。

人生の行き詰りは、結局自我の殻が破れないところにあるが、このことは自分の力では不可能である。譬えば畳の上に居て畳を動かすことは不可能であるが、畳から離れて始めて自由に動かすことも出来る。私自身は親鸞聖人の徳風に浴しはじめから、自分の考えよりも聖人の仰せの方がたしかで間違いないことと自然に思うようになった。往生とか浄土という言葉も、うそのない信頼出来る聖人が

仰言ることであるから本当であろう、私が未熟なためにうなずけないだけであるが、何時かは聖人に同心させられる時も来ようという風に転じていった。

ゲエテは「言葉と信仰の宗教から、心と行いの宗教になる」と云っているが、聖人の言葉を信じるというようになつた。これが私の身について私のいのちとなり行いとなるには幾山河がなほ横たわっていた。

同時にその頃、境涯の差ということをしきりに反省しはじめた。譬えば芭蕉翁の、古池や蛙飛びこむ水の音、よく見ればなすな花咲く垣根かな、また、山路来て何やらゆかしすみれ草、等々にしても、翁の行くところ見るところに新しい驚きをもって句が出来ているが、凡俗の私にはただ平凡な些細事としか感じられぬ、そこに非常な境涯の差がある。この道や行く人なくて秋の暮と翁を悲しませたところである。又囲碁や将棋にしても段違いの人から見られると、自分ではこれが最上と思つてやっていると、手落ちだらけで危く見ておられぬことはかりであろう。

私共凡愚の身で、一角心得顔でいることも、覺者、仏陀の御目には誠に危うく憐れむべき者とうつるであろう。その釈迦仏が「毒矢の譬」を示されたことは誰も知るところである。或人が仏に「人間はどこから生れてきて、また死後はどうなるでしょうか」とおたずねした時、そういう問

けて極楽という、彼の土に仏まします、阿弥陀と号す」とその消息を告げられる。そこは弥陀仏のまします世界であつて、我々の力をもつてしてはとて手のとどこかぬ世界で、そこは、所謂煩惱による苦樂は滅して仏のさとり光によつてあらわれる常樂、無上の樂園であると説かれていた。

維摩經(ゆいまきよう)に、舍利弗が不審をおこして「仏がいられるところが浄土とお聞きしていますが、この娑婆世界に現に釈迦仏が出世されていて浄土とは思えません」。

と申上げると、梵天が現れて「盲者には色は見えぬように、汝の智慧では浄土も穢土としか見えぬ。自分には天界と見える」と誠める。舍利弗は「そうでしょうが私には納得がいきませぬ」と云い張つた。釈尊は、これを憐れまれて御足で大地を押されると、たちどころに莊嚴された浄土が現れ、舍利弗がはじめて大きに慶喜したとある。

これは、私共の相対有限の智慧では手もとどこかぬ浄土も仏力が加えられるとそこに影現することを教えられる。浄土とは清浄な国土である、そこは仏が樂しむためでなく、あらゆる河川も海に注ぐと一味の潮になるように、一切の人々を導き入れて仏と同じさとり智慧を得させずはおくまいとの切なる大悲心によつて建立された世界である。

長い間浄土の有無を問題にしていたが、浄土は仏の大慈

いは戲論(成仏に役立たない無用の論)として退ぞけ、一切お答えにならずに

「現在毒矢に射られたなら、何をしても医師を迎えて治療して貰わねばならぬ。一寸待て、その医師はどこから来た人か、これからはどういうことを願っている人かなどと聞きただす人は居るまい。今現に貪欲、瞋恚、愚痴の三毒の矢をうけている身には、何をしても医師を早く迎えて手当を受けねばならぬ」

と答えられている。又明治時代に慕われた行誠上人は、人々が不急のことをおたずねすると「それは死なぬ人の云うこと」の一言をもつて退けられたそうであるが、私もこうした導きをうけて、現在あるがままの煩惱にしばられた身を省みるようになった。

七、浄土について

歎異抄の第二条に、関東から身の危険もかえりみないで京都に聖人をおたずねした同朋に向つて、
「ひとえに往生極樂のみちを問いきかんがためなり」と仰言つて、人と生れきて、いのちにかけても聞くべきは往生極樂の道ひとつであると指適していられる。

さて往生ということが私共の持ち合わせの智慧では難解であるように極樂、浄土もまた手のとどこかぬ世界である。阿弥陀經に「是より西方十万億の仏土を過ぎて世界あり名つ

悲心からひらかれた世界で、私共凡夫の思慮分別を越えた境界であつた。私共があると思うからあるのでも、無いと思つて無いのでもない、仏のまします限り厳然と存在するところである。地獄は自業自得の必然の結果であるから私共がその種をまきさええせねばあるはずがない、但し五濁の世に煩惱具足の身が悪縁にふれて織りなすものは、虚仮不実の域から脱し得ないので、当然地獄は一定すみかと思はず外は無い。

こうしたこと、自分の智慧で知れるものではないが、太陽の光で太陽を仰ぐように、仏の大悲によつて恵まれる仏智の光照をこうむつてはじめて浄土の影がさしをめる。

○ 釈迦弥陀の慈悲よりぞ 願作仏心はえしめたる

○ 信心の智慧に入りてこそ 仏恩報ずる身とはなれ

○ 智慧の念仏うることは 法蔵願力のなせるなり

信心の智慧なかりせば、いかでか涅槃をさとらましの門、浄土への扉もひらかれるのである。いただいたのもでもてなす田舎かな、とあるように、釈迦弥陀二尊の種々に善巧方便をめぐらして下さるお蔭で信心を發起せしめられ、その信心の智慧によつてうなずくことの出来る境涯が浄土であり地獄である。

未完

あとがき

思出の多い八月になりました。原爆の投下、停戦の日、そして近角常音先生の御忌月を迎えました。幸に御晩年の西源寺様での御講話を大字三右エ門様が克明に謹録して下さっていましたので、その一部を頂きました。

先生はいつも、純信仰を鼓吹して下さい、信仰上自力のはからいを厳しく注意してお導き下さいました。

またやりそこない、またやりそこない、それだからお呆れないお慈悲でないかを、常観先生から聞きとられたことを常にくりかえして仰言いました。

柳瀬様の人生随想中から、信仰篇の二節を頂きました。

柳瀬様は常音先生を親のように兄のようにお慕い申していられました。そして八十になられた今日でも「永遠の青年」の若々しさを持っています。

中島彰悟様は尾西市の方で住田智見師の導きをうけられて、すでに浄土にかえられました。三十年間、御自坊を中心に修道会を続けられ、法灯を掲げて下さった方であり、「法は人を待って伝わる」とよく話していられました。幸に有縁の知識によらずんばいかでか易行の一門に入ることを得

んや、と歎異抄にあります。盲人同様の身が、求めず願わないのに向うからさしおられるよき人の仰せに導かれることがなければ、はてしない流転が定めであります。「法によれ人によるな」とは、よき人を否定したものでなく、よき人によって法を知らされ、法が知られることによつて、いよいよよき人の恩も仰がれるのであります。月を差す指を、月を見ないで指にひっかかるなどの心が、「法によれ人によるな」であります。執着と我慢の強い私共への悲心一杯の誡めであります。

木村さんから念仏詩抄を頂きました。私同様、病気々々のひぐらしながら、東本願寺同朋会館で働いていられます。私は家が真言宗でしたが、木村さんは若い時人生問題から真言僧となり、やがて念仏者となりました。共々にお念仏一つに支えられ、まもられ、はぐくまれて、信の旅を辿らせていただいております。

一道会 御案内

時、十月二十四日午後一時
所、京都市右京区山田開町、浄住寺
道筋、京都駅より苔寺行きバス、終点下車。
新京阪、桂駅乗りかえ、上桂下車。
本年は特に十月二十四日に決定いたしました。御参会お待ち申上げます

御案内

- 毎月第一、二、三日曜、午後一時半。一道会例会
- 市電、新郊通り二丁目下車、東入ル三筋目、左入ル。
- 毎月二十四日、午前午後、昭和区小椋町、教西寺、法話会。
- 市電、御器所通り下車。市バス、北山下車。

定価 半年 四〇〇円(送共)
一年 八〇〇円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫

電話八二一〇七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番

郵便番号 四五七